◎蚊やり火

岩代　服部水仙子

「疊たゝいてこちの人……」吃驚して擧げた顏を、ちらとご覽なされて其まゝごろりとお横に、珍らしくはないけれども、あゝまたかとばかり思はず胸迫るのを去り氣なく枕進めて、蚊遣りの火を搔きたてた。

「私しや悋氣でなけれども……一人でさした傘なれば……片袖濡れやう筈がない……」奥ではまた母樣がお寐みなさらぬのにと、ハラ〳〵しながらも私にはそれをお止め申す勇氣は無い。家を外にしてのお遊びも、皆妻たる私が至らぬ故と諦めて、千鳥足に夜半の門を叩く夫を迎へて、私は決して惡い顏一つしたことがなかつた。けれども夫は却てそれを喜ばぬ……やう見受けられる。今の唄……これとても決して偶然にお口にのぼつたのではないのだ。いつか恁う仰言つたことがある、愛すればこそ嫉妬といふものが生ずるのだと。夫は私の愛をひやゝかなものと思つてゐらつしやるのだ。私だとて、私だとて女だもの、つめたき閨を淋しく一人守りあかした曉、熟柿臭い息吹きかけられて、それで氣持ちの宜いといふことがあらうか、たゞ私は、家庭の團欒に飽くことが出來ないで、外に於いて慰樂を求められるのを、夫を十分に樂しましめることの出來ない妻の身として、假にも嫉妬がましいことが言はれようか、と常に謹んでゐるのに。成るべくならばと思ふ心から、如何したならば夫の意に叶ふかと、氣に氣を付けるが却てお氣に障るかして、鼻息を窺ふの、兢々としてるのは嫌いだのと、時折のお小言、伴ふ母樣のお不興は素より覺悟の前乍ら、つれ添ふ夫のつれなさに、人知れず袖濡らしては、結ぼるゝ思に、おのづと閉ぢ籠り勝ちの、是また快活を好きます夫のお氣には召さぬのであらう。何も彼も知り拔き乍ら、心引きたゝぬ我身の意久地なさ、辛らき口に泛ぶ笑みの、むしろ憎らしい。嫉妬！女の弱點を戒められて居る嫉妬！それも今の我身にくらべて見れば、穗に出る程の嫉妬を喜ぶ弱點を男の持つて居る以上、それ相當に必要なものではなからうか？それともこんな弱點を持つて居るのは、我夫ばかりなのであらうか？あゝ同窓廿八名の友、今は皆大方は人の妻である。會つて見たい。會つてお互にそれぞれの、不平、意見、夫に對する仕向けなどを、聞きもし語りもし、思ふさま泣いて見たい！さう昨日は我母校に同窓會があつた筈、それにしても出席した人達は、誰と誰であつたやら。あゝ世の荒磯の汐干の濱邊に、荒浪知らで遊んだ昔が懷かしい、戀しい。

それと氣付いてさゝふる間もなく、いつか頰を傳はつた一雫は、ぽとりと灰に小さな穴を穿つた。積んでは崩し、頽しては積みして居た炭に、燒けた火箸は指先にあつく、我に反つて思より覺めた。

「貴夫！ラムネ召し上りますか？」團扇をもつて靜かに風を送りながら、にじり寄つて顏

さし覗けば、いつの間にやらすや〳〵と夢に入つて居らつしやる。稍々くつろげた裕かな其お胸に、私といふものはどれだけ席をとつてゐるのやら。蚊遣りの煙りは這うて亂れて青葉を渡る風サラ〳〵。鼾の聲は高うなつた。

【入力者注】原文には傍点等が付されていますが、煩雑を避けるために省略しました。

底本：「女子文壇」明治四十(1907)年第三巻第十二號
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年三月十三日
改訂：令和四年二月三日
リンク：水野仙子ホームページ